

Philip Roth の *American Pastoral* における 盲目性と不可視性、想像力と創造性

杉澤 伶 維 子

Abstract

American Pastoral, the first novel of what loosely forms Philip Roth's "American Trilogy" differs from the other two novels in its presentation of the protagonist's life. The narrator Nathan Zuckerman disappears in the first fifth of the book, and the life of Seymour "Swede" Levov is narrated as "biographical fact." The truth is, however, that the second half of the Swede's life story is mostly created or invented by Zuckerman. Furthermore, the Swede himself is described as an imaginative person.

Blindness and invisibility—the Swede's inability to fully understand his wife, daughter, and himself, and the invisibility of history—are two metaphors that occur throughout the book. Therefore, the protagonist's story is to be examined from both an individual's and historical perspective.

Using Leslie Fiedler's notion of the link between imagination in Jewish American literature and the Jewish American dream of assimilation in the post—World War II decade, this essay first attempts to explore the significance of protagonist's and narrator's imaginative/creative power. The essay then turns to an examination of historical aspects by focusing on the two wars—World War II and the Vietnam War—that had respectively a great impact on the Levov family in the opposite direction. Lastly, the imaginative strategy adopted by Roth in *American Pastoral* is placed within the context of Jewish American literature in the 1990s.

はじめに

アメリカ現代史の主要な時代を検証したと言われる、フィリップ・ロス

(Philip Roth) の “American Trilogy” (以下「三部作」と略記) の第一作目 *American Pastoral* (1997、以下 AP と略記) は、語り手ザッカーマン (Nathan Zuckerman) が最初の 5 分の 1 の導入部にしか登場しない。主人公「スويد」ことシーモア・レヴォヴ (Seymour “Swede” Levov) の人生を書くことになったいきさつを説明した後、いつの間にかザッカーマンは姿を消しており、その後物語は三人称で語られ、語り手ザッカーマンが再び登場することはない。ロス自身がインタビューにおいて、“Zuckerman was my insider, my knowledgeable wedge into the Swede’s life, who somehow gave me the freedom to know him. On Page 90 I jettisoned Zuckerman—he was no longer necessary.” (McGrath 8)、と述べているように、ザッカーマンの役割は限られているように思える。

三人称で進行する物語を読み進むうちに、読者はザッカーマンの存在を忘れ、ここに語られているスويدの人生が客観的な事実であると思い込んでしまう可能性がある。しかし、成人してからのスويدの人生が、彼の周辺人物からの聞き取りや事実調査をある程度含むものの、かなりの割合がザッカーマンの想像の産物であることは、出版当初から多くの批評家が認めるところである。

「三部作」として一括りにされている作品であるが、その成立の経緯を見ると、AP は、1990 年代終わりに執筆された他の二作品、*I Married a Communist* (1998) と *The Human Stain* (2000) と異なっている。ヴェトナム戦争終結の頃、約 70 ページ書いたところで行き詰まり、そのままになっていた原稿を、*Sabbath’s Theater* (1995) 出版後、作家自身のオルターエゴとしてすでに読者には馴染みのザッカーマンを、語り手として登場させることを思いついて AP を完成させた、とロスは上記のインタビューにおいて告白している (McGrath 8)。

Debra Shostak はアメリカ議会図書館に保存されているロスの原稿を調査して、AP の原型となる最初の下書きが 1972 年に書かれていることを確認し

ている (123-25)。この下書きの一部は、その後、ホロコースト犠牲者のアイコンともいべきアンネ・フランクが収容所を生き延び、アメリカでエイミー・ベレット (Amy Bellette) という偽名を使って生きていたという、1956年当時作家修行中のザッカーマンの大胆な空想として、*The Ghost Writer* (1979、以下 *GW* と略記) に発展的に使われている。*GW* は豊かな想像力を武器とする「ユダヤ系アメリカ作家」ザッカーマンの出発を宣言する作品だが、同じ下書きから着想を得た *AP* でも、想像力へのこだわりを見せているように思える。

ユダヤ系アメリカ文学の想像力がユダヤ系アメリカ人の同化の夢と不可欠にかかわっていることについて、Leslie Fiedler は *Waiting for the End* (1964) において以下のように述べている：

From the start, the Jewish-American writer has desired not only to create living images of his people in the imagination of all Americans, [. . .]; but also, by creating such images and achieving such a redemption, to become himself part of the American scene, a citizen among citizens, one more author on a list which begins with Benjamin Franklin and Washington Irving. The very notion of a Jewish-American literature represents a dream of assimilation, [. . .]. (70)

本稿では、Fiedler が指摘したユダヤ系アメリカ人の同化と想像力の不可分な結びつきを念頭に置いて、先ず、主人公スイードのアメリカ社会への同化過程における盲目性、想像力、創造性、そして自己認識に焦点を当てて読み直す。また、語り手ザッカーマンが、スイードの人生を作品として再構築するために用いた想像力と創造性にも注目する。さらに、戦争がユダヤ系アメリカ人の家庭にとってどのような形で脅威となったのか、第二次世界大戦とヴェトナム戦争を比較することで、スイードの物語を歴史的視座から検証する。そして、ユダヤ系アメリカ人の想像力／創造性を、作家ロスがいかにして1990年代にふさわしい作品に構築していったのかを考察する。

1. スイードの想像力、盲目性、自己認識

スイード自身の、そして小説の最大の疑問点、すなわち言語障害（吃音）以外はすべてにおいて恵まれた子どもだったメリー（Merry）が、なぜ親に反抗し暴力的行為に走るようになったのかを解明しようとするところから、三人称によるスイードの物語は始まる。カトリック教徒である妻ドーン（Dawn）との間に生まれた娘メリーの不鮮明な民族アイデンティティ、スイードとメリーとの間に生じていたかもしれない近親姦の感情が、その原因として挙げられている。

だが最大の要因は、メリーがスイードのファンタジーによって創り上げられた娘であることにある。オールド・リムロックの町に家つきの100エーカーの土地を購入したとき、スイードには、庭にある大きな木の枝から吊るされた手作りのブランコに乗って、空中高くに遊ぶ幸せな少女のイメージができて上がっていた。それはすでに高校生の時に彼が作り上げていたヴィジョンであった。彼が仕事から帰って来るのをブランコに乗って待っていた娘が、彼に駆け寄りキスをする。彼は娘を抱き上げ肩車をして、妻のいるキッチンへと入っていく。“imagine”と“see”という単語が繰り返されていることからわかるように（190）、高校生のスイードはその光景を幻視していた。娘のニックネーム「メリー」はブランコで楽しく遊ぶ少女のイメージからつけられたものである。だが、メリーはスイードの視覚イメージから創造された娘であり、彼からことばを与えられていない。メリーの言語障害は声を奪われたことに対する父への怒りである。

メリーの失踪後、彼女からの使者として、リタ・コーエン（Rita Cohen）と名乗る若い女性がスイードを訪れる。リタは、現金の受け取り場所に指定したニューヨークのホテルの一室で、自分をファックすればメリーのところに案内すると言う。“To introduce you to reality. That’s the aim”（143）と言って、リタは彼女の陰部をスイードに見せようとする。見ることを拒むス

イードに対して “Look at it. Describe it to me. Have I got it wrong? What do you see? Do you see anything? No, you don’t see anything. You don’t see anything because you don’t look at anything.” (145 強調筆者) と彼の盲目性を指摘し、さらには、彼のことを “a man always averting his eyes because it’s all too steeped in reality for him” (146) と批判する。スイードが現実から目をそらし、現実を見ようとしないう人間であることを糾弾するリタは、メリーのダブル（オルターエゴ）である。

リタ（＝メリー）のスイードに対するメッセージは「(現実を) もっとよく見て!」、つまり “See more!” と言っているのである。スイードの本当の名前 Seymour は、まさに彼の本質的欠陥を表している。1972年当時、ロスが書いた下書きの主人公の名前はミルトン・レヴォヴ（Milton Levov）であった。20年後、ロスがこの下書きをもとにストーリーを新たに構築する際、レヴォヴはそのままにしてミルトンをシーモアに変えたのは、明らかにスイードの盲目性を強調するためである。

「スイード」という呼び名は彼が高校生の時、北欧系と見間違われる彼の容貌から、体育の教師がつけたニックネームである。その後も、スイードはそれを “an invisible passport” (207) のように身につけて、楽観的なアメリカ人へと “evolving” (207) していった。スイードの人生の好調も悲劇ともに、彼が「シーモア」を忘れて「スイード」として、表面的なことしか見なかったために生じたものである。

五年後、ジャイナ教徒¹となってスイードの前に姿を現したメリーは骨と皮にやせ細り、微生物を傷つけないためという理由で歯磨きや洗浄も拒否している彼女の身体は悪臭を放つ。地元の雑貨店を爆破して一人を殺害しただけでなく、その後も爆破事件にかかわり、さらに3名を殺害していたことを、メリーは後悔する様子もなく告白する。それが現実のメリーであることを受け入れられないスイードは、“I must see you.” と、なおも彼が作り上げた娘

のイメージを「見る」ことに固執するのだが、“You’ve seen me.” (266) というメリーのことばで突き放される。

奇しくもその日、彼は他にもこれまで見えなかったもの、そして今見ても信じたくないものを目撃してしまう。それは妻ドーンと WASP の隣人ビル・オーカット (Bill Orcutt) が、彼の家キッチンで愛撫している場面である。スويدは自分のことをドーンの良き夫であると自負し、彼女がこの石造りの家を気に入っていると思い込み、現実の彼女を見ていなかった。アメリカ独立の起源ともいべき土地で家畜の世話をする元ミス・ニュージャージーの妻というのも、彼が作り出した視覚的ファンタジーに不可欠の装置であった。

しかし、メリーがレイプされ4人を殺害していたこと、彼女の言語療法士であり一時期彼の愛人であったシェイラ (Sheila) が爆弾事件を起こしたメリーを匿っていたこと、ドーンがオーカットと関係を結んでいたことを知ったことで、スويدはいかに自分が盲目であったかに気づく: “How to penetrate to the interior of people was some skill or capacity he did not possess.” (409)。人を外側からしか判断できない愚かさゆえに、彼は娘、妻、愛人を見ることができなかった (failed to see, 409-10)。おそらく彼は自分自身さえ見ていなかったのではないか、とスويدは反省する。

これまでスويدは “his ability not to see” (418) に固執していたが、この日を期に、ついに彼の目は開かれる。彼がようやくにして見る事ができた娘と妻の本当の姿は、彼自身の中で抑圧してきた部分ではなかったか。Monika Hogan が論じるように、太って暴力的な反戦運動家メリーは、同化の過程でスويدが抑圧してきたアメリカへの怒りであり、殺生を拒否して痩せ細ったジャイナ教徒メリーは、同化の完全性を望んでいた彼の完璧主義の現れでもある (13)。そして、美容整形手術を施した新しい顔、近代的な新しい家、WASP の新しい夫とともに新しい人生を始めようとするドーンは、アメリカというパストラルで再出発をはかる「アメリカのアダム」とし

て、スイードの行為を反復、というより、それを出し抜く。一見穏やかで抑制のきいたスイードの中に抑圧されていた極端に走る傾向が、娘と妻を通してアクティング・アウトしたのである。

小説の最終近くで、漸くにしてスイードは自分の本当の姿に気づいたが、最後まで彼の空想癖は変わらない。まず、メリーがオールド・リムロック近くに潜伏していたことを、シェイラが彼女の夫に告げ、夫が警察に通報したかもしれない、あるいは彼が電話で話をした弟ジェリー（Jerry）が FBI に密告したかもしれない、さらには彼自身が通報者となっていたかもしれない、とスイードの頭の中はめまぐるしく空想が駆け巡る。

とその時、パーティの席から彼の父ルー（Lou）の悲鳴が聞こえ、恐怖にとらわれたスイードは瞬間的に想像してしまう——メリーがぼろ布とヴェールをまとしてパーティに姿を現し、それを見たルーが心臓発作を起こして倒れたのだと。実は、ルーは、オーカットの妻でアルコール依存症のジェシー（Jessie）に対して、家父長的権威でケーキとミルクを無理に口にさせていたのだが、ジェシーが渡されたフォークでルーの目をつこうとしたために、ルーが上げた悲鳴であったことがすぐにわかる。この事件も、現実を見ようとしない父親的な存在への怒りの対象として「目」が攻撃されたと解釈できる。こうして、窮地に陥っても衰えることのないスイードの想像力を提示して、小説は唐突に閉じられる。

2. ザッカーマンの想像力

以上のように、スイードの半生は、彼の想像力に基づいた家庭の創造とその挫折として語られている。だが、スイードの想像力として描かれているのは、実際には語り手ザッカーマンのものである。彼の人生を語るザッカーマンに注意を向ける必要がある。

第1章に語られているのは、少年ザッカーマンが憧れていたスイードのスポーツ選手としての活躍（1940年代）と、数か月前（1995年）、スイードか

らの突然の手紙に応じて食事をともにした時のことである。96歳で亡くなった父のメモワールを書くための助言をして欲しい、というのが会食の口実であったが、スイードは息子たちの自慢や、父から受け継いだ手袋製造業「ニューアーク・メイド」の経営について微笑みを絶やさずに話し、ついに核心的なことに触れることはなかった。その様子にザッカーマンは尋常でないものを感じ取り、表面下にあるはずのものをいろいろ憶測してみるが、結局その時は、“This guy is the embodiment of nothing.” (39) と結論づけてしまう。

その結論が完全に誤っていたことがわかるのは、その数か月後、同窓会でスイードの弟ジェリーに会って、数日前のスイードの死去とともに、当時高校生だったメリーが引き起こした1968年当時の事件を知ったことによる。その後、少年時代スイードが住んでいた地域や、結婚後居を構えた地域を訪問したり、当時の記録を調べたりして、彼のことを“the most important figure of my life” (74) と言えるほど、日夜彼のことを熟考したザッカーマンはスイードの人生を書くことを決意する。

スイードの人生を本にしようというザッカーマンの執筆意欲を刺激したのは何だったのか。いくつかの理由が考えられるが、スイードが助言を依頼してきた意図を全く理解できなかった愚かさ (“naive” 80) と、核心的なことを聞き逃してしまった (“I missed it entirely.” 80) ことへの悔しさが最大の理由ではないだろうか。人間の内面を推察する力、そこから想像する力、ともに作家に必要な能力が自分の中で働かなかったことへの後悔が、執筆への意欲を駆り立てたと考えられる。

他の誰かになりたいという少年の頃のザッカーマンのファンタジーを、今回誰よりもスイードが強く刺激した。現在、スイードの悲劇を知ってしまったザッカーマンは、“to let your hero’s life occur within you when everything is trying to diminish him, to imagine yourself into his bad luck, to implicate yourself [. . .] in the bewilderment of his tragic fall [. . .]” (88) と、自分を凋

落していく英雄スイードと重ね合わせることでファンタジーを膨らませていく。ついに、“I pulled away from myself, pulled away from the reunion, and I dreamed . . . I dreamed a realistic chronicle. I began gazing into his life [. . .]” (89) と、自分の前半生を省察するスイードの意識の流れに自然に移行することによって、ザッカーマンの大胆な空想は始まることになる。

3. 戦争と家庭

それではもう一度小説の導入部に戻って、1940年代及び50年代が当時のユダヤ系の若者たちにとってどういう意味があったかを、ザッカーマンが語った内容にしたがって考えてみたい。愛国心を高めた戦争、そして戦後のアメリカの繁栄——彼らが名実ともに「アメリカ人」となったことを実感できた時期であった。1995年10月、62歳のザッカーマンは、1950年卒業の高校の同窓会で行う（だが実際は行わなかった想像上の）スピーチの原稿で次のように確認する。自分たちが “during the greatest moment of collective inebriation in American history” (40) に高校生活を送り、“*Make something of yourselves!*” (41) という可能性に満ちていた、と。このように、第二次世界大戦はスイードを始めとするユダヤ系の若者の人生に影響を与え、戦後は彼らのアメリカ化を促進する追い風となった²。

スイードは高校生のころの空想に基づいてオールド・リムロックに家庭を築いた。二千年にわたるディアスポラの歴史において国を持つことができなかったユダヤ人にとって、家族は彼らの民族の文化を維持し、かつ外敵から身を守るために最も重要な単位であった。ロスは幼少年期の体験に基づいた自伝的作品 *The Facts* (1989) において、“the Jewish family was an inviolate haven against every form of menace” (14) であった、と彼自身の家庭を振り返り、*The Plot Against America* (2004、以下 PAA と略記) では、反ユダヤ主義の危機に立ち向かう家族の絆の強さをフィクション化している。

ユダヤ教には無関心、シナゴグを “foreign” で “unhealthy” (315) と

まで感じていたものの、スイードはプロスポーツ選手になることを断念して父親から家業を受け継ぐことで、ユダヤ民族固有の強固な家族の伝統を維持する。100エーカーのアメリカの土地——しかも、独立戦争当時ワシントンが陣地を張ったと言われる由緒ある町の土地——購入に思いをかけるスイードに、ヨーロッパで長年土地所有を許されなかったユダヤ人の悲願を見ることができる。石造りで “indestructible, an impregnable house” (190) を住まいとすることに、外敵から家庭を守ろうとするユダヤ人の家族意識の表れを見ることができる。家業を引き継ぎ、“the perfected image of himself as he had been the perfected image of his father” (85-86) であるべく子孫を設けることで、スイードは、基本的には父の “nice Jewish boy” (*RMO* 31) であり続けようとした。

結婚後、スイードは彼の両親とドーンの家族とともに、ユダヤ教でもカトリックでもない、アメリカ起源の祝祭日である感謝祭とともに祝ってきた。スイードが感謝祭に際して抱くファンタジーは “just one colossal turkey for two hundred and fifty million people — one colossal turkey feeds all [Americans]” (402) である。それは、一年に一度、24時間に限り、二億五千万人のアメリカ人が宗教や民族の起源を忘れ、アメリカ人であることを祝うことのできる “the American pastoral” (402) である。この「アメリカ＝パストラル」を信奉したナイーブな人間としてスイードは描かれている³。

ところが、安全な場所であるはずであったスイードの家庭に、突如歴史が侵入してくる。ザッカーマンは以下のようにコメントする: “History, [...] with all its predictable unforeseenness, broke helter-skelter into the orderly household of the Seymour Levovs and left the place in a shambles[...] but history, in fact, is a very sudden thing.” (87 強調筆者)。David Brauner が下線部の oxymoron を説明するように、歴史は現在から振り返れば確かに「予測可能」ではあるが、当事者たちには「目に見えないもの」である (26-27)。スイードが築いた家庭を打ち砕くのは、彼自身の盲目性ととともに、

歴史そのものの特性である不可視性である。歴史は“the strong arm of the unforeseen” (36) を持って不意に家庭に侵入してくる。

1960年代、アメリカが介入したヴェトナム戦争は、テレビ報道を通して目に見える形で、アメリカの各家庭のリヴィングルームに押し入ってきた。1960年代前半、ヴェトナムの僧侶たちの焼身自殺（殉教）の様子が、繰り返しそのままテレビで報道された。メリーが反戦運動に興味を持つようになったきっかけは、10歳か11歳の頃にテレビで見た僧侶たちの殉教の模様であろう、とスイード（＝ザッカーマン）は推測している。153ページから154ページにかけて“into their home”というフレーズが4回集中して繰り返され、スイードたちの家庭に外の世界が侵入してきたことを強調する⁴。

第二次世界大戦中は、家庭の中にいれば外の世界の惨劇を見なくてすんだ。スポーツに興じることもできた。あるいは PAA に描かれているように、強固なユダヤ人家庭では、家族が協力して反ユダヤ主義から身を守ることでもできたであろう。しかし、ヴェトナム戦争は遠いアジアの国の出来事で、彼らにとって長年の艱難辛苦の種であった反ユダヤ主義とは何の関係もないことであつたにもかかわらず、スイードの家庭に襲いかかってきた。

個人の想像力に基づいて創造された家庭が、個人の責任を越える予測不可能な歴史の侵入によって破壊されることもあり得るということを示し、AP はレヴォヴ家の盛衰について、それが自己責任（スイードの盲目性）か、それとも歴史に翻弄されたためか（歴史の不可視性）、という二者選択的な結論を回避している。それゆえ、小説の最後は“*And what is wrong with their life? What on earth is less reprehensible than the life of the Levovs?*” (423) と、疑問符を付した状態で終わっている。

4. 結 び

ユダヤ系アメリカ人は、アメリカへの移民以来終始一貫して、自らを「アメリカ人」として想像／創造することによって、社会における自分たちの居

場所を築いてきた。ロスには彼らの自己想像／創造について、当初から “So one had to [...] begin to create a moral character for oneself. That is, one had to invent a Jew. It was somewhat like being in a dream.” (“Jewish Intellectual” 171) だと意識してきた。*AP* でザッカーマンがスويدに投影した「目に見えない」能力である想像力は、本論冒頭に引用した Fiedler が指摘したように、戦後及び1950年代におけるユダヤ系アメリカ人の社会への同化、そしてユダヤ系アメリカ文学の創造と、本質的にかかわる能力であった。

しかしながら、今まさに成就するかに思えた彼らの願望が、突然「目に見える」形で家庭に侵入してきたヴェトナム戦争と反戦運動によって打ち碎かれたとき、文学の世界においても “Jewish Decade” が終わりを告げていた。ザッカーマンは *AP* の中で、(*GW* の中心的プロットであった) 若き日に訪れたユダヤ系アメリカ作家の巨匠ロノフ (Lonoff) のことを、“his sense of virtue is too narrow for readers now” (63) と言及し、かつてのユダヤ系アメリカ文学へのノスタルジアを垣間見せている。

AP は、ユダヤ系アメリカ作家の想像力／創造性を、第二次世界大戦からヴェトナム戦争までの歴史のコンテキストと擦りあわせている作品である。さらに *AP* は、Elaine Safer が指摘するように、“an imagined reality” を創り出す “clue to the creative process” を与えて、読者に “a postmodern game” を挑戦してくるメタフィクショナルな作品として (96-97)、1990年代のユダヤ系アメリカ作家ロスの想像力を誇示する。読者に語られた内容がスويدの実人生だと思わせることこそ、想像力を武器とする作家の真骨頂であり、したがって、最終的にザッカーマンは語り手として再登場してスويدの人生をまとめたり総括したりする必要はない。ザッカーマンは読者の「目に見えない」存在となって、一見したところ伝統的なストーリーテリングの手法を使いながら、ポストモダンな戦術を仕掛けている。

主人公の自己認識といういささか古めかしいテーマを扱いながらも、ポス

トモダンの手法を取り込んで、想像力／創造性をキーワードに、ユダヤ系アメリカ人の同化とその後を歴史的視座から描き直すことで、ロスとは彼にとっての「アメリカン・パストラル」、つまり「想像力のパストラル」を1990年代半ばに構築したのである。

註

1. ジャイナ教は紀元前6世紀から5世紀ごろ、インドでマハービーラによって創設された宗教で、徹底した不殺生と苦行、禁欲主義を主張する。
2. 1942年にユダヤ人の隣に住みたくないという人々は42%だったが、1950年には近所にユダヤ人がいても気にしない人々が69%、1954年には80%となった。(Dinnerstein 131-32, 156-67)
3. 一連の「ザッカーマンもの」としては *AP* の前作となる *The Counterlife* (1987) において、イギリス人女性の胎内にはザッカーマンの子どもが宿っているという設定だが、ザッカーマンは、最終的に人間は子宮という「パストラル」から生まれ落ちた瞬間に、歴史の中に投げ入れられると結論づけている。
4. Glaser は、フロイトが用いた“the uncanny”の概念を援用して、安全なはずの家庭に外の世界が入り込んでくる恐怖を論じている。

引用・参考文献

- Brauner, David. “‘What was not supposed to happen had happened and what was supposed to happen had not happened’: Subverting History in *American Pastoral*.” Shostak (2011): 19-32.
- Dinnerstein, Leonard. *Antisemitism in America*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Fiedler, Leslie A. *Waiting for the End*. New York: Stein, 1964.
- Glaser, Jennifer. “America’s Haunted House: The Radical and National Uncanny in *American Pastoral*.” Shostak (2011): 44-59.
- Hogan, Monika. “‘Something so Visceral in with the Rhetorical’: Race, Hypochondria, and the Un-Assimilated Body in *American Pastoral*.” *Studies in American Jewish Literature*. 23 (2004): 1-14.
- McGrath, Charles. “Zuckerman’s Alter Brain.” *New York Times Book Review*. (7 May, 2000): 8-10.
- Safer, Elaine B. *Mocking the Age: The Later Novels of Philip Roth*. New York: State U of New York P, 2006.

- Shostak, Debra. *Philip Roth—Countertexts, Counterlives*. Columbia : U of South Carolina P, 2004.
- . ed. *Philip Roth : American Pastoral, The Human Stain, The Plot Against America*. London : Continuum, 2011.
- Roth, Philip. *American Pastoral*. London : Vintage, 1997.
- . *The Counterlife*. London : Jonathan Cape, 1986.
- . *The Facts : A Novelist's Autobiography*. London : Jonathan Cape, 1988.
- . *The Ghost Writer*. 1979. *Zuckerman Bound*. New York : Farrar, 1985.
- . *The Plot Against America*. Boston : Houghton Mifflin, 2004.
- . *Reading Myself and Others*. 1985. New York : Vintage, 2001.
- . “The Jewish Intellectual and American Jewish Identity.” *Great Jewish Speeches Throughout History*. Eds. Steve Israel and Seth Forman. Northvale, N.J. : Aronson, 1994. 167-81.